

## 幕末明治の写真師列伝 第二十四回 下岡蓮杖 その二十三

蓮杖には亡き妻・美津（池之町香取屋・臼井伝八の長女）との間にできた二男・東太郎と長女・よしの二人の子供がいたが、明治12年（1879）に浅草公園五区の蓮杖の家の近所に居て、蓮杖とも親しくなっていた嶋崎善右衛門の世話で、後妻として登和を娶ることになった。

そして、翌明治13年（1880）に三男・喜代松誕生、明治15年（1882）に四男・十字郎誕生。ちょうどこの頃、アメリカにいた太郎次郎より蓮杖の元へ、最新の写真材料と共に早取り乾板というのが送られてきた。これはちょうど同じ時期にボストンにいた小川一真が太郎次郎に贈ったもので、太郎次郎はさらにこの早取り乾板（ゼラチン乾板）を日本の蓮杖の元へすぐに送ったのである。この早取り乾板は、すでにアメリカで普及していた乾板技法による写真術で使用するもので、従来の湿板法による写真撮影と比べて、格段に進歩した種板で、これにより写真撮影の対象物が動くようなものでも一瞬のうちに撮影ができるようになった。

蓮杖はこの早取り乾板を近所で開業していた最も信頼の深い弟子の江崎礼二に与えて、試写をさせている。江崎礼二は弘化二年（1845）岐阜の江崎で生まれ、幼い頃は塩谷宇平に養育され、長じて久世治作に写真術を学んだ。明治3年（1870）同郷の権大参事小野崎蔵男に従って東京に出て、その書生として勤めた。翌明治4年（1871）8月に小野崎蔵男は帰郷したが、江崎は横浜に行つて1ヶ月程蓮杖に師事している。翌年冬、芝日蔭町にて間借りで写真スタジオを開業したがこれはうまくいかず、知人に資本金を借りて、明治5年（1872）に浅草公園五区の浅草寺本堂裏（現在の浅草寺病院敷地内の南東辺り）に移転、その後、評判を呼んでいた。江崎礼二はこの早取り乾板を使って、明治16年（1883）隅田川での水雷爆発演習の様子や海軍競漕会での短艇競漕を撮影して、早取写真師として一躍有名になった。明治31年（1898）には、東京市議會議員・市参事会員に選出されて、議員時代には東京に於ける高層建築物の先駆けである浅草凌雲閣を発案している。明治43年（1910）1月28日逝去。享年66歳。

明治15年（1882）5月8日及び10日付『函館新聞』に連載された記事「古人物油絵の顛末」によれば、廃れていく東海道の宿場を大津から品川まで訪ねて、一枚ずつ油絵（「懐古東海道五十三驛眞景」）を描いていった洋画家・亀井竹次郎が、古人物図三十五枚を油絵で模倣して、それを蓮杖が浅草公園で展覧したことが書かれている。この油絵は後に蓮杖の弟子・横山松三郎が蓮杖から譲り受けて、当時の函館県博物館へ寄贈されたと伝えられている。

明治17年（1884）秋、蓮杖の一番弟子でもあった横山松三郎が肺病再発のため、市谷亀岡八幡宮社内の隠居所で亡くなった。享年47歳であった。

同年（1884）1月13日付『東京繪入新聞』によれば、「寫眞油繪等に名ありし下岡蓮杖といへる人が今度浅草公園地へ土細工の人形あまたを觀物に出したるが中にも大きなは觀世音の像にて高さ一丈七尺是に岩組の臺等を加ふれば二丈六尺のよし。同公園地の寫眞師江崎禮二氏が寫したるを見るに、面相體格等も至極よく出来て居る様に見えます。」とあり、還暦を過ぎた蓮杖はこういう見世物ばか



隅田川水雷爆発（明治16年江崎礼二の早取り写真）

りをやっていたことが報じられている。

明治18年（1885）には、次女・ひさが誕生するも、ニューヨーク滞在中であった養子・太郎次郎が病死。

この頃の蓮杖の元には、自分の弟子たちや孫弟子たち、写真師仲間、絵師たちだけではなく、様々な人々が蓮杖の話聞きに、また蓮杖の人柄に惹かれて、訪ねて来るようになっていた。その代表的な人に文人の淡島寒月や山本笑月、幸田露伴、内田魯庵などがいる。

淡島寒月は、『蓮杖翁の千社札』（大正三年六月『東都』第二号）では蓮杖の千社札の逸話を、『下岡蓮杖翁の杖』（大正六年五月『風俗』第二卷三号）では、蓮杖の杖についての製作秘話について書き残している。また、『趣味雑話』（大正七年二月『大供』第一号）では、「（前略）その後下岡蓮杖氏が浅草にいて椿岳の絵に似せて浅草画を描いたが、ハトロン紙へ木版画で置彩色した物で、その面の狂歌は実は寒月代筆仕ったものだ。（後略）」と、蓮杖の浅草画について簡単ではあるがその様子を述べている。これらは『梵雲庵雑話』（「書物展望社、1933年」、「平凡社（東洋文庫）、1999年」、「岩波書店（岩波文庫）、1999年」）で読むことができる。

淡島寒月はとにかく蓮杖とはウマが合ったらしく、仲が良くてお互いに頻りに往来していたのである。

山本笑月は『明治世相百話』（第一書房、昭和十一年四月）の中で「その昔奥山名物五人男 変人、奇人、通人ぞろい」と題して浅草公園の奥山時代の名物男の五人の一人として蓮杖を以下のように取り上げている。「（前略）その隣りの下岡蓮杖、これも九十二歳の長寿を保ったが、写真、洋画等文化の先駆者で、当時桐の大箱へ眼鏡（レンズ）をはめ込み西洋風景のクローム画を入れて「万国のぞき眼鏡」と称し、家の前へ七、八個並べて観せていた。江戸っ子で、足袋屋の小僧だったが、その頃は足袋を足に合せて詭えるものが多く、小僧の蓮杖は顧客の足を計るのを憤慨して十三歳の時出奔、狩野董川の門人になったという、子供の頃からの変り物。（後略）」（山本笑月『明治世相百話』は中公文庫版も昭和五十八年に刊行されている）

（森重和雄）